審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 3022号	氏名	蒲池 直紀
審 査 担 当 者	主 査 中野敬 (印) 副主査 田中清瑞 (印) 副主査 久下 亨 (印)		

主論文題目:

Evaluating the therapeutic effect of lenvatinib against advanced hepatocellular carcinoma by measuring blood flow changes using contrast-enhanced ultrasound
(造影超音波検査での血流変化を用い、進行肝細胞癌に対するレンバチニブ治療の効果を評価する)

審査結果の要旨(意見)

切除不能肝癌の薬物療法において分子標的治療薬であるレンバチニブは投与早期より腫瘍血流の減少を来すことが報告されている。演者らは肝癌 19 症例でレンバチニブ投与前、投与後 1 週間、投与後 4 週間に造影超音波検査で腫瘍血流を評価し、造影 CT の治療効果判定とあわせ、評価を行った結果、投与後 1 週間で腫瘍の血流が 50%以上減少した群および投与後 4 週間で腫瘍の血流が減少した群で有意に治療効果が良好であったと報告している。これらの結果からレンバチニブ使用 1 週後に造影超音波で腫瘍血流変化をリアルタイムに評価することがその後の治療効果（奏効性）を予測する上で有用と推察される。本論文内容は臨床的に有用性が高いと思われ学位授与に値するものと評価する。しかし、本研究は前治療歴を有する症例が含まれ、レンバチニブ 1 剤についての検討であり、症例数も少ないことから、今後はさらに他の分子標的治療薬との比較検討や多数例での検討が望まれる。

論文要旨

レンバチニブは、2018 年 3 月に切除不能肝細胞癌に対して適応となった。レンバチニブは投与早期より腫瘍血流の減少を来すことが報告されている。血流が鮮明に確認できる点、より詳細にリアルタイムの血流を評価することができる点、呼気排泄により腎機能障害を来さない点から早期の造影超音波検査による腫瘍造影効果の評価が治療効果判定に有用と考えた。そこで、肝細胞癌の造影効果の変化を評価することで、患者に低侵襲で、正確にレンバチニブの効果判定を早期に行えるか検討を行った。レンバチニブ投与前、投与後 1 週間、投与後 4 週間に造影超音波検査で腫瘍血流を評価し、造影 CT の治療効果判定とあわせ、評価を行った。結果は投与後 1 週間で腫瘍の血流が 50%以上減少した群および投与後 4 週間で腫瘍の血流が減少した群で有意に治療効果が良好であった。